あとがき

総合研究所紀要を発行することができました。多大な経済的支援をいただいている法人をはじめとした学内の関係者の皆様にお礼申し上げます。本紀要では、ぜひ学内の研究の多様性を見ていただきたいと思います。本学でのほとんどの研究は、研究者の専門性をベースにして、専門分野についての最近のトピックスなどを研究単位で実施できる方法でアプローチされてきたと思われます。一方、臨床をベースにされた研究でも総合研究所の利用者の場合には、総合研究所のファシリティーに何らかのアクセスがあったということで、本学の研究の全体とは言えないことも重要な事実ではないかと考えます。総合研究所では、研究機器の使用環境の整備を通して学内の研究者の研究活動を支援することを主眼にして参りました。その目的において総合研究所は重要な位置付けを占めてきたと言えると思います。一方、近年は、動物実験や生化学的な実験を行わず、患者さんの臨床経過を治療などの観点から統計的に分析するタイプの研究も盛んに実施されています。医学が分子レベルの基礎的な研究から薬物や医療機器の臨床試験などを行い、診療成績の向上に直結するところまで広い範囲に拡大しています。少人数の研究者では扱うのが困難な状況でもあります。そのような状況下ではこれまで以上に実験の部分については効率化が求められていますし、出口を見据えた実験支援が必要になってくると考えております。

総合研究所の紀要をご覧になってこのような本学の取り組みの架け橋になるようなアプローチのご提案を歓迎します。それらが今後整備するべき研究所の施設のあり方を示すと考えています。研究所所属の田邊准教授、技術職員の永野、佐藤、川上、久保木、事務職員の新保の貢献にも感謝します。最後に、技術職員の泉氏が昨年病死されたことは大変残念なことでした。ご冥福をお祈りします。

令和４年１月１８日

総合研究所　所長
三谷　昌平